

組 番 氏名

二つの文章を比較して読む（新燃岳噴火）

太郎さん達は、二つの資料を読み比べ、文章の構成についての学習をしています。【資料A】・

【資料B】を読み、あとの問いに答えなさい

【資料A】

「ズーン」

平成二十三年一月二十六日、水曜日、午後三時四十分、隣でガス爆発が起きたような音とともにガラス窓全体が異様に振動した。音のした方向にただ事ではない気配を感じて、おそるおそる出てみた。玄関を出て中央公民館の屋根の上方、そこには信じられない光景があった。すぐ目の前の霧島連山の一角が噴火し、噴煙を黒々とあげている。学校と地続きのすぐ前の山が噴火している。背筋が凍った思いがし、今後どうなるのか思案が頭を駆け巡った。まもなく、臨時校長会が招集され今後の対策が話し合われた。この日は、一晩中、爆風と振動が続き、午前三時頃には頂上付近で火砕流のようなものが見えた。朝五時頃、学校にいたらいったん噴火が止まった。

一月二十七日、木曜日、風向きがこちらに変わり火山灰が降りそそいだ。周り全てが真っ白になり、車を運転しても舞い上がる火山灰でよく前が見えない。翌日は臨時休校となった。

一月三十日、日曜日、真夜中の十二時、臨時校長会が役場対策本部のすぐ横の会議室に招集され、狭野地区に避難勧告が出た事が伝えられた。児童生徒の安全を第一に、明日は臨時休校と決定した。この日の噴火は、特に激しく、噴火口からは、赤い溶岩が噴出し、噴石が飛び、雷が数十本も火口と上空の噴煙の中を縦に走った。ガラス窓が空振で割れないか心配な程、揺れ続けた。

いろいろな事を経験してきたが、噴火への対応策については想像すらした事がなかった。噴石がどの程度あるのか、火砕流の発生はどこまで来るのか、綱渡りの日々であったが、人的な被害を受けた児童生徒が一人も出なかった事だが、唯一救いであった。

【資料B】

轟音、地響き、降灰。真冬の出来事であった。学級通信からの抜粋である。

「狭野小学校の子どもたちと一緒に学習することになりました。となりの図工室に四年生が十五名ほど、担任の先生とやってきました。」

「昨日に引き続き、牛乳、パン、バナナ・デザートでした。お腹が空いていたこともあり、ぺろりでした。早く、給食室も復旧するとよいです。」

「噴火の後、『雨かな』というようならばらという音。どうやら細かな石が少し高原小まで届いたようです。できるだけ教室の中央に寄って学習するように呼びかけた所でした。」

『先生、体育がしたいよ』『先生、校長先生に相談してください。』・・返答に困ってしまいました。自分もそうでしたが子ども達の学校で運動がしたいという思いは切実ですね。」

子ども達と毎日を過ごしながら、新燃岳の驚異と、諸支援の頼もしさを知った。どちらもこの地に生きてこそ感じることできた思いであった。

それ以上に強く実感した事がある。それは、噴火と降灰に直面してもそれを受け入れ、しっかりと適応した子ども達の輝きである。あの状況のなかで、大人の不安をよそに、食べて、遊んで、学んで、歌を歌ってみせた子ども達のあの輝きと尊さは何ものにもかえがたい。こんな子ども達に、明るい将来がないはずはない。

活動の終息を待ちながら、私は現在もそんな子ども達の前に立っている。私は、この子ども達に寄り添い続ける。

困難を受け止め、今もなお、真っ直ぐに日々を過ごしている高原の子ども達。雄大な自然に抱かれながらきつと力強く生き抜くと信じている。【新燃岳噴火 百人の記録 高原町教育委員会】

